

女人採集図鑑

第二十六卷 黄昏の市バス編

by
モツクン カズロー

Kazuro Mokuun

これは別世界の小旅行である。眼や耳や心だけの世界ではなく、想像を絶した素晴らしい別世界への旅。あなた

は今、ミステリーゾーンへ入ろうとしているのである。
私は、夜の街を彷徨しようと、家の近くに在る停留所から東系統の市バスへ、乗り込んだのである。とある黄昏時の事であった。何の気兼ねもなく、私は車内が良く見渡せる一番後の一段高い席に腰を降ろした。乗客は全部で10人程、比較的静かな車内は、まるで「鬼太郎の幽霊電車」のように不気味な雰囲気醸し出していった。



前席に座って、他愛もないグルービー話に花を咲かせている、ヘビメタ少年2人組に気をとられていたその時であった。乗務員後方、前から2列目に一人で座っていたOL風女が、いきなり妙な声をあげて蹲まったのだ。

「ど、どないしてんオイ！」などと気遣う乗客は、もちろんきまうび居るわけはない。冷たい視線が一斉に彼女に集中した。そして次の瞬間「ビチャビチャビチャー！」という音がしたかと思つと、車内は異臭と汚水に見舞われた。汚水は木の根のように枝分かれして、私の足下まで流れ込んできた。乗客は沈黙を破りあわてふためいた。

「ゲー！汚い何これー！」であった。靴は汚れるわ、足の置き場は無くなるわで仰天した皆は、両足をじたばたさせた。結構、パニックである。どうやら全員が失禁と思つたらしい。私は真偽を確かめる為、その問題の汚水に恐る畏る鼻を近づける事にした。そして確認した。鼻から眼につんざくような酸い臭いの正体は、胃液だったのである。どうやら乗り物酔いか病いの末路らしいが彼女はといえば、足元に汚水を垂れ流したまま微動だにもしない。常識人なら羞恥心で一刻も早く下車したくなるのが普通である。そのタイミングを外してしまったのか、そうする気力や体力すらも失っていたのか、彼女はとにかくそのまま、席を立つとはしなかった。

バスが揺れると、汚水の占める床面積は広がっていく。バスが揺れる度乗客は足をバタつかせる。可哀相には思

うが、こうなる前に私は彼女に下車を勧めたかった。しかしよくよく考えると小学生以下の行為である。当然のことながら彼女は、車内の誰にも顔を向けることのできない状態におちいっていた。事が起こってから10分以上は経過したのだろうか。彼女は目的地と思われる停留所でしつかり降りてしまった。同情するより私は、彼女の屈強な精神に敬服してしまつたのだ。背を向けて降りる際見えた、彼女の横顔は蒼白くまるでポストマンを操るルパー星人のようであった。

近頃巷には、彼女に限らず窮地に追い込まれると、TPO知らずのヒンシユク党に立候補してしまう奴等を良く見かけるが、奴らこそ何を隠そう地球侵略を試みるビジターなのである。

彼女を非難し軽蔑した私が、この夜何故か飲みすぎて、自宅の便器でゲロパックしてしまつたのは何かの因果だったのだろうか。

これは今だ人間に知られざる次元における物語である。そこには空間の觀念もなければ、時間の觀念もない。無限に広く、又無限に小さく、光と影の中間にあつて……科学と迷信、空想と知識……その間に横たわる世界。それは想像の世界である。我々はこの世界を未知の女人採集地帯と呼ぶ。

フロアール 1900年生まれ、ツァーコンター、ティスロビュア、アドランナー。氏は最後の京都に棲む、イマの女性の應に密着的といつらチナメスのメスをいれさせれば下一品。しかし、それは本質的に女性を愛しているからと表現も出来るだろう。氏のコラムは身ぶりも解れることが基本なのだ。痛感せられる痛感かそこにある。タイムカプセルに入れておけばならぬ、切り刻んだ現代を反映している。

FICTION